

ISSN 0913-6266

日本ブラームス協会 会誌

赤いはりねずみ

ZUM ROTEN IGEL



2019
第47号

赤いはりねずみ 目次 第47号 2019

巻頭言	社会変われど、ブラームスは不変	本多中二	5
論文	ブラームスの「交響曲第2番」作品73におけるオーケストレーション ー トロンボーンの象徴的表現について	西原 稔	7
No.152 例会報告	ブラームス「歌曲とヴィオラの魅力」	重成 瞳	36
No.153 例会報告	ブラームス／2大協奏曲の魅力	江川知典	37
論文	マックス・ブルッフ《交響曲第2番へ短調》作品36 ーブラームスの交響曲の先駆け	本田裕暉	40
論文	ブラームスと同時代のハンガリー国民音楽	市島聡之	50
随想	管弦楽がブラームスを創る	河合丈則	60
連載	ブラームス録音小史第10回 LP レコード〈モノラル編3 ウェストミンスター〉	山田豊明	64
海外通信	子供のためのコンサートとオランダの教育、医療、年金について	金丸葉子	76
活動記録	2019 年度	重成 瞳	81
後援・推薦	コンサート2019年～2020年	羽木光彦	83
英文目次			88
編集後記			89
入会案内			
扉絵	二十歳のブラームス	染川英輔	作
口絵写真	No.152 春例会／夏季レクチャーコンサート／ 秋季準例会レクチャーコンサート／No.153 冬例会	羽木光彦	

■日本ブラームス協会 No.152 春例会
 ブラームス「歌曲とヴィオラの魅力」
 2019/6/2(日) 2pm ヤマハ銀座店 6F サロン
 共催 (株) ヤマハミュージックリテイリング銀座店

Japan Brahms Society (JBS) No.152 Spring Concert.
 "The charm of Brahms's Songs and Viola"
 14:00 Sunday 2 June 2019 Ginza Salon of Yamaha Music Tokyo
 Cosponsored JBS and Yamaha Music Retailing YAMAHA GINZA

ブラームス/スケルツォ Op.4 6つの小品より Op.118-2
 8つの小品より Op.76-8 P. 香月すみれ
 ブラームス/歌曲 Ms. 阿部奈緒 P. 川村沙耶香
 「愛の誠」 「5月の夜」
 「ナインゲルに寄せて」 「雨の歌」
 「あなたの青い瞳よ」 「むかしの恋」
 「僕らはそぞろ歩いた」 「墓地にて」
 「歌の調べのように」
 ブラームス/ヴィオラソナタ第1番 ヘ短調 Op.120-1
 Va. 荒木開 P. 香月すみれ
 ブラームス/アルトとヴィオラのための2つの歌 Op.91
 Ms.阿部奈緒 Va.荒木開 P.川村沙耶香

Brahms / Scherzo Op.4 Six Pieces Op.118-2
 Eight Pieces Op.76-8 P. Sumire Katsuki
 Brahms / Lieder Ms. Nao Abe P. Sayaka Kawamura
 Liebestreu Op.3-1 Die Mainacht Op.43-2
 An die Nachtigall Op.46-4 Regenlied Op.59-3
 Dein blaues Auge Op.59-8 Alte Liebe Op.72-1
 Wir wandelten Op.96-2 Auf dem Kirchhofe Op.105-4
 Wie Melodien zieht es Op.105-1
 Brahms / Viola Sonata No1 in F-minor Op.120-1
 Va. Kai Araki P. Sumire Katsuki
 Brahms / Songs for contralto with Viola obligato Op.91
 Ms. Nao Abe Va. Kai Araki P. Sayaka Kawamura



ブレイク Introduction

ピアノ小品 Piano pieces



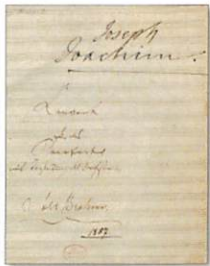
歌曲 Lieder

ヴィオラソナタ Viola sonata

Alt.とVa.のための2つの歌 Songs for Alt. and Va.

■日本ブラームス協会 夏季レクチャーコンサート
 2019/8/25(日) 2pm 駒場カエザンザブル
 (1)論文講演 西原稔教授 JBS 顧問
 ブラームスの《ピアノ協奏曲第1番》研究
 ~作品の創作過程とパレストリーナ受容の
 可能性に関する考察~
 テキスト/会誌 46/2018 論文 6-33 頁
 (2)「P協奏曲1番 Op.15」CD 鑑賞 本多会員、山田幹事

Japan Brahms Society (JBS) Summer Lecture Concert
 14:00 Sunday, 25 August, 2019 Café ensemble Komaba
 (1)Lecture of essay Prof. Minoru Nishihara (JBS)
 "A Study in the Piano concerto No.1 of Johannes Brahms
 ~Consideration on the Composing Process
 and the Possibility of the Reception of Palestrina~
 Text: Annual journal "Zum Roten Igel No.46/2018" Page6-33
 (2)Listening CDs recommended by Mr.Honda and Mr.Yamada.



ブラームスの「交響曲第 2 番」作品 73 におけるオーケストレーション
—トロンボーンの象徴的表現について

On the Orchestration of “Symphony No.2 Op.73” of J.Brahms
—Especially on the Symbolic Expressions of Trombones

西原 稔
Minoru Nishihara

第 1 章「交響曲第 1 番」と「交響曲第 2 番」

ブラームスにおいて「交響曲第 1 番」と第 2 番の創作の意味は全く異なった。彼にとって古典的な理想を具現した交響曲の創作はもっとも大きな命題であり、きわめて強い使命感をもって最初の交響曲の完成に臨んだ。シューマンによって音楽の世界への道筋を提供されたブラームスに対して、彼の交響曲の創作に寄せる社会の期待はきわめて大きく、それはブラームスには大きな重圧であったのは想像に難くない。ブラームスが「交響曲第 1 番」の初演を、信頼を寄せるオットー・デッソフの指揮でカールスルーエにて行ったのは、明らかに失敗を危惧していたことを示唆している。彼はウィーン初演の前に各地で演奏会を重ね、満を持してウィーン初演に臨んだ。

ブラームスのこの重圧は、19 世紀後半における 4 楽章構成の古典的な交響曲の創作の困難さを意味していた。彼が「セレナード第 1 番」（作品 11）の作曲に際してデトモルト宮廷楽団のコンサート・マスターのカール・バルゲーアに述べた、「ベートーヴェンのあとで敢えて交響曲を書くこととすれば、それは完全に別のものでなければなりません」（注 1）は、ブラームスの率直な感想を述べている。実際、リストが 1857 年に「ファウスト」と「ダンテ」の合唱を伴う交響曲を初演したのち、1860 年にブラームスはとくにリストを批判の対象として「ベルリナー・エコー」誌に記事を寄稿し、リストと新ドイツ派を批判した。ブラームスはリストを中心とする新ドイツ派の音楽とは相いれなかったが、彼はまだ彼らに対する自身の交響曲の回答は見いだせていない。

1876 年に初演されたブラームスの「交響曲第 1 番」は、彼の知人や友人の間で必ずしも十分な理解を得られておらず、とくにクララ・シューマンは厳しい批評を

ブラームス「歌曲とヴィオラの魅力」
Songs and viola charm / Report of №152 concert

重成 瞳
Hitomi Shigenari

令和元年6月2日初夏の日曜日、ヤマハ銀座店コンサートサロンで開かれたこの例会は、「歌曲とヴィオラの魅力」というタイトルで、西原稔先生のプレトークに続いて以下の曲目が演奏されました。

ブラームス / 「スケルツォ」 Op. 4 「6つの小品」より Op. 118-2

「8つの小品」より Op. 76-8

Pf. 香月すみれ

ブラームス / 歌曲「愛の誠」 Op. 3-1

「5月の夜」 Op. 43-2

「ナイチンゲールによせて」 Op. 46-4

「雨の歌」 Op. 59-3

「あなたの青い瞳よ」 Op. 59-8

「むかしの恋」 Op. 72-1

「僕らはそぞろ歩いた」 Op. 96-2

「墓地にて」 Op. 105-4

「歌の調べのように」 Op. 105-1

Ms. 阿部 奈緒 Pf. 川村 沙耶香

ブラームス / ヴィオラ・ソナタ 第1番 he 短調 Op. 120-1

Vla. 荒木 開 Pf. 香月 すみれ

ブラームス / アルトとヴィオラのための2つの歌 Op. 91

Ms. 阿部 奈緒 Vla. 荒木 開 Pf. 川村 沙耶香

これまでの協会の150回を超える例会の歴史の中、ヴィオラのための例会、歌曲のための例会は数回ありましたが、ヴィオラと歌曲の例会は1983年のブラームス生誕150年記念のシリーズ以来2度目のことであり、会員の中でも例会で聴くのは初めてという方々が多かったのではないのでしょうか。4人の出演者がそれぞれ素晴らしいソロやデュオを演奏されたのち、プログラムの最後に置かれた「アルトとヴィオラのための2つの歌」に集結していくさまはまさに圧巻でした。この例会コンサートは前年の会誌第46号の最終編集委員会の席で、西原先生が提案して下さったもので、それまでヤマハサロンでのコンサートは、ベテランの演奏家をお招きしての「○○ブラームスを語る」形式だったのが、今回「フレッシュコンサート」として若く有望な皆さんによる真摯な演奏の例会になったのはとても嬉しいことでした。

一見地味なプログラムのように感じられますが、実に“ブラームスファン好み”の渋い曲目でありながら、若い奏者たちの“ブラームス大好き度”が十分に表出さ

マックス・ブルッフ《交響曲第2番へ短調》作品36:ブラームスの交響曲の先駆け
Max Bruch's Symphony No. 2 in F minor, Op. 36: A Precursor to Brahms' Symphony

本田裕暉

Hiroaki Honda

はじめに

今年、2020年に没後100年を迎える作曲家マックス・ブルッフ（Max Bruch, 1838-1920）は、ヨハネス・ブラームス（Johannes Brahms, 1833-1897）と同時代のドイツで活躍し、後にはヨーゼフ・ヨアヒム（Joseph Joachim, 1831-1907）の後任としてベルリン高等音楽学校の副校長を務めた重要な音楽家の一人である。しかしながら、現在のところ、その研究と評価は十分になされているとは言い難い。今日でも頻繁に演奏される作品としては《ヴァイオリン協奏曲 第1番 ト短調》作品26（1868）や《スコットランド幻想曲》作品46（1880）、《コル・ニドライ》作品47（1881）などの独奏楽器と管弦楽のための作品と、最晩年に作曲された3曲の室内楽作品があるが、その他の作品が取り上げられることは稀である。しかし、ブルッフは3作のオペラや交響曲、多数の合唱曲、歌曲、ヴァイオリンとピアノのための《スウェーデン舞曲集》作品63（1892）を含むいくつかの室内楽曲など、実に幅広いジャンルに作品を遺しており、その中には注目に値する楽曲も数多く含まれている。

本稿では、それら注目すべき作品の一つである《交響曲 第2番 へ短調》作品36（1870）を取り上げる。ブラームスの交響曲よりも数年早く作曲されたブルッフの《交響曲 第2番》はどのような特徴を有する作品であるのか。また、この交響曲は19世紀ドイツの交響曲史においてどのように位置づけるべき作品であるのか。楽曲分析を交え検討する。

1. ブルッフの交響曲創作

マックス・ブルッフは交響曲を3作品出版しているが、習作時代にも3曲の交響曲を書いていた。1作目は1851～52年、14歳の頃の作品であり、1852年3月5日

ブラームスと同時代のハンガリー国民音楽

Hungarian national music of the same age as Brahms

市島聡之 Akiyuki Ichishima

はじめに

クラシックでハンガリー音楽といえば、ブラームスの《ハンガリー舞曲第5番》が特に有名である。しかしその主旋律はブラームスのオリジナルではなく、ハンガリーで流行していた「ジプシー音楽」を引用した編曲だった。ブラームスは、ロマ（ジプシー）の音楽を「ハンガリーの民俗（あるいは民族）音楽」と誤解していたわけだが、当時のハンガリー人作曲家による「ハンガリーの音楽」と「ジプシー音楽」は、様式や旋律に共通点が多く、両者が混同されるのも無理のないことだった。

19世紀のハンガリーでは、政治的ナショナリズムと連動してロマン派の「国民音楽」が形成されていたのだが、コスモポリタンの音楽家でもあったリスト以外は、ハンガリー人作曲家とその作品が広く知られているとは言い難い。ブラームスとハンガリー音楽の関係を考察する上で、同時代のハンガリー人作曲家による作品を知ることは少なからず有意義であると考え、本稿は、ブラームスと活動時期が概ね重なるハンガリー人作曲家による「知られざる国民音楽」を端的にまとめてみた。各項目の末尾では、現在CDなどで試聴が可能な参考音源の一部を紹介する。

なお、ハンガリー人の名前について、現地式では姓・名の順で表記するが、混乱を防ぐために括弧内やオペラの標題などを除き欧米式の名・姓表記とする。「ジプシー」という民族呼称については、差別的に用いられてきた経緯を考慮して「ロマ」とよぶべきだが、「ジプシー音楽」や「ジプシー楽団」などの用語は、歴史的使用例としてそのまま用いることとする。

1. 19世紀のハンガリーにおける民族と国家

19世紀前半のハンガリー王国は、現在のルーマニアやクロアチア、スロヴァキア、ウクライナなども含む広大な国家であり、中心的民族はマジャール人であったものの、それまでのオスマン帝国やハプスブルク家による支配を経て、多民族が複雑に入り組んでいた。ヨーロッパ各国を揺るがした1848年の革命前後には、政治的な「ハンガリー人」としての国民意識が形成されていくが、激化した独立運動はハプスブ

ブラームス録音小史 第10回

“Short history of Brahms Music Recording”vol.10

LPレコード〈モノラル編3 ウェストミンスター〉

山田豊明

Toyoaki Yamada

ローランド・ジェラットの『レコードの歴史』によれば、アメリカでは1949年から1954年のわずか5年間で、LPレコードを発売する会社が11社から約200社に急増したという。1948年に米コロムビアが開発したLPレコードという新しいメディアの登場と、テープ・レコーダーの開発によるレコード制作の簡便化がきっかけとなり、次々と新しいレコード会社が設立されたのだ。同時にアメリカでは、それまでポピュラー専門だった既存のレコード会社があらたにクラシック分野に進出したり、他社のソースを利用してクラシックを販売していたレコード会社が積極的に自主録音を開始するなどということが行われた。

米コロムビア、ビクターと続いたブラームス録音小史のLPレコード編では、この後、英デッカ、EMI、ドイツ・グラモフォンとメジャーを続けていくやり方もあったが、アメリカのウェストミンスターの場合、新興のマイナー・レーベルでありながらヨーロッパの多くのメジャー・レーベルよりもLPの発売が早かったということもあり、ここはアメリカ編を3回続けることで、ひとつの区切りとすることにした。

ウェストミンスター・レーベルの登場

モノラル時代のマイナー・レーベルを考えたとき、真っ先に名前が浮かんでくるのが1949年に設立されたウェストミンスターだ。同じ頃、雨後の竹の子のごとく次々と誕生した新興レーベルの中でもクラシック、ことに室内楽にかけては質・量ともにウェストミンスターの右に出るものがいなかった。ラインズドルフの指揮によって史上初のモーツァルト交響曲全集を世に送り出したことも、このレーベルの大きな功績のひとつとしてあげられる。

この新興レーベルを成功に導くことになる大きな特徴が2つあった。ひとつは、

子供のためのコンサートとオランダの教育、医療、年金について

Concerts for children and education,

health care and pensions in the Netherlands

金丸葉子

Yoko Kanamaru

最近では北欧の年金や教育事情が日本でも話題になっています。前回は主にモンテッソーリ教育についてご紹介しましたので、今回は2019年に出演しました子供のためのコンサート、そして今話題になっているオランダの医療や年金制度も取り上げていきたいとします。

子供のためのコンサート（オランダ）

コンセルトヘボウ管弦楽団はコンセルトヘボウという音響の優れたホールをレジデンスホールとして使用しているため、どのコンサートもコンセルトヘボウ管弦楽団が演奏している、と思われることがあります。

コンセルトヘボウ管弦楽団はコンサートホールとしてのコンセルトヘボウとは全く別の団体です。そのため、オーケストラの事務所はコンセルトヘボウとは別の場所にありますが、2019年に改築されました。そしてその改築に伴い、小ホールや練習室を開設しました。何と、今までオーケストラ専用の練習室がありませんでした。そして日本でいう会議室くらいのスペースですが、コンサートができるようなホールができて、録音もできるような仕組みになっています。

その新しいホールが開設された時期に、オーケストラメンバーの何人かでサン＝サーンス作曲「動物の謝肉祭」をオランダの小学校の生徒達に聴いてもらいました。

(1) 沿革

1973年5月7日ブラームス生誕140年の日にブラームスの音楽愛好家数名の発起人と顧問の故本田脩先生(音楽学)により約30名の会員で「ブラームスの会」を発足させる。その後の活動実績をもとに1979年に名称を「日本ブラームス協会」と改称して現在に至る。例会コンサートは153回また会誌『赤いほりねずみ』は47号を数える。海外ブラームス協会との情報交換も盛んで、最近は若手演奏家の支援にも力を入れている。現在会員数約100名。

(2) 例会コンサート

ブラームスの室内楽曲を中心とし小ホールで客演または会員など第一線で活躍する演奏家によるコンサートを催行。



No2/斎藤秀雄先生と小倉朗氏



No78/W・ヴァジッチ氏



No113/Vc林峰男音楽監督

(3) 会誌「赤いほりねずみ」(ISSN 0913-6266)

研究論文、随想、海外情報、協会活動録などからなり、研究者から愛好家までを対象とした国内唯一のブラームス音楽の専門誌で年一回発行している。会誌は会員および国会図書館をはじめ国内音楽大学図書館、海外ブラームス協会に送付されている。また1997年没後100年の記念事業として『ブラームスの実像』を音楽之友社より出版¥2800。

(4) 会報「Botschaft」発行

会員への通信「行事予定」「報告」「推薦コンサート」「新譜CD情報」「会員情報」などの内容でB5版。

(5) 作品研究会/レクチャーコンサート/CD鑑賞会

30名程度の集りで顧問またはゲストによるレクチャー&コンサート、会員をスピーカーとしてCD鑑賞会を開催する。1月の新春新人コンサート、ブラームス映画の鑑賞会などユニークな企画を開催。

(6) 夏季合宿

例会、作品研究会のほかにも夏季コンサートまたは夏季CD鑑賞会が1泊2日の合宿形式で軽井沢・八ヶ岳、蓼科、伊豆などで開催される。「夜を徹しての音楽放談」が恒例となっている。

(7) 海外交流

海外のブラームス協会はドイツ、オーストリア、スイスなどブラームスが訪れた各地にあり、例外である日本とアメリカのブラームス協会も活発な活動をしている。「会誌」などの情報交換を行っている。



会誌



海外の協会発行の研究書



CD鑑賞会



会報



ブラームスの実像

(8) 入会と組織・運営

ブラームスの愛好・研究団体として「ブラームスの音楽を通して自由な意見が交わされる場」をモットーに上記の活動を行っております。入会は所定申込書を事務局に送付頂き運営幹事会で受理後、年会費を納入頂くだけで特に愛好家、音楽家などの会員区別はありません。

- ・組織 顧問/西原稔(桐朋学園大学教授)
会長/羽木光彦 幹事/佐藤元哉、重成瞳、杉田忠志、山田豊明
- ・運営 顧問と幹事会にテーマ毎に会員が加わり審議する拡大幹事会方式で行っています。
- ・年会費 入会金¥1000 郵便振替口座 00150-5-138721 日本ブラームス協会

- 一般会員 <首都圏> ¥10000 <地方・海外> ¥5000
- 家族会員 <首都圏> ¥12000 <地方・海外> ¥7000
- 学生会員 <首都圏> ¥2000 <地方・海外> ¥2000 四半期毎計算